特別企画展「東アジア文人の肖像」展によせて

明清時代の文人肖像画

―「石林浄香図」（個人蔵）をめぐって―

中国では紀元前より、様々な人物像が描かれてきました。仏教や道教、儒教に関連する人物、賢人、歴代皇帝など、教化や勧戒、啓発、歴史記録といった目的で描き継がれてきたテーマはもちろん、存命中あるいは故人の容貌を表す肖像画もまた、交遊や称揚、追慕などの文脈で描かれてきました。本稿では、明清時代に流行した文人肖像画について、「石林浄香図」（乾隆元年〔1736〕、紙本墨画淡彩、個人蔵。図1）という作品を中心に述べます。

中国で人物肖像は、東晋の顧愷之の「精神を伝え、迫真的にその姿を写すのは、まさにその瞳である」、「頬に三本の毛を加えれば、その人の肖像は更に精彩になる」、北宋の蘇軾の「その人のつくろった姿でなく、自然な姿を描かねばならない」など、画家や知識人たちの関心のもと、様々に論じられてきました。そうした中で文人達は、臨席者たちの姿を表した雅集図、ある個人を称える肖像画などを描きました。中には元末の「楊竹西小像」（王繹写照、倪瓚（げいさん）補景。北京故宮博物院蔵。図2）の如く、「肖像を描く際には、人相学に通じていなければならない」と論じた元末の肖像画家・王繹が、像主・楊竹西の面貌を迫真的に描き写し、当時を代表する文人である倪瓚が像主の人格を投影するような背景を描くという、分筆スタイルの文人肖像もありました。明清時代には、社会における「相法」（人相学）の普及も背景にあってか、こうした形式の文人肖像が多数描かれています。

ご紹介する「石林浄香図」は、まさにその貴重な一作例です。本図は、庭園と思われる場所で、ひとり寛ぐ人物の姿を描きます。本図の像主である高鳳翰（1683～1748）は、18世紀の揚州で活躍した八名の画家「揚州八怪」の一人に数えられる、当時を代表する著名な文人画家です。山水、花卉、花鳥など多彩な画題を善くし、本図の背景を描いたのも高鳳翰です。一方、高鳳翰の面貌を描いたのは、泰州（今の江蘇省泰州市）の李鴻仁なる人物で、詳細は不明ながら、人物肖像を善くしたようです。なお画中の高鳳翰の自題（乾隆元年〔1736〕）から、本図の画題が「石林浄香図」であること、彼の54歳のときの姿を描いたらしいことがわかります。

画中の高鳳翰は、ほぼ正面に顔を向け、ゆったりとした白い衣服に身を包んで石台に坐し、机にもたれた左手で、自身の長い髭を弄んでいます。画題の「石林」にふさわしく、画中には林立する岩石が描かれます。高鳳翰像の背後に、ねっとりとした質感をもつ、緑青と代赭で彩られた巨岩が聳え、画面前方には、青、黒、そして褐色の岩が立ちます。また石林に添って、画面むかって左奥と手前には、青い水に薄紅や白の蓮の咲く、清廉な蓮池が描かれます。画題の「浄香」は、蓮の香りを指すでしょう。蓮は泥中に咲くことから高潔の象徴として文人達に愛された花ですが、高鳳翰も本図の2年前の「山水花卉図冊」（大阪市立美術館蔵）などで、しばしば蓮を描いています。「石林浄香図」では高鳳翰自身が、ひとり屋外で奇岩と蓮池の風景、一帯にただよう清らかな蓮の香りを楽しんでおり、いかにも文人情緒に満ちた舞台設定です。これは当時、同僚との軋轢などに悩んでいた高鳳翰の精神的な理想を表しているかもしれません。なお高鳳翰は、本図の翌年にリウマチで右手が使えなくなり、以後左手で画を描くようになるため、本図は右手で描いた最後期の作の一つとみられます。

次に、李鴻仁による肖像を見てみましょう（図3）。目元や鼻などの諸部位、小皺などが、細緻な線を丁寧に重ねて表され、また色彩の微妙な変化による皺の陰影や目元と頬の赤み、向かって右目下の染み（図4）、チリチリとした髪質まで再現された白髪交じりの豊かな髭などは、54歳頃の高鳳翰その人の姿を、実にみごとに、活き活きと描写しています。ただ正面向きの顔、鼻の形、目の周辺に刻まれた皺などは、明末に広く読まれた王繹の肖像画指南『写像秘訣』の挿図（図5。図は明末の龍陽子編『学府全編』〔陽明文庫本〕巻17「画譜門」所収のもの）にみるような、人相学にかなうとされる理想的な面貌に近似し、ある程度はその考えに添ったうえで補正がなされていると推察されます。

画面左上には、桐城（今の安徽省桐城市）の方世泰による跋があります。「山壁立以截鋏。水湛深而潏冽。髯兮。髯兮。吾知爾文章之所得。貞観。」（鉄を断つかの如き山壁が立ち、水は深く清らかに流れる。ああ、おひげの君よ、私はあなたの文章がこの画にふさわしいとわかる）「貞観」（白文方印）。本図の肖像にみる高鳳翰のトレードマークと、本図に託された高鳳翰の想いをくみ取って称揚した言といえるでしょう。

実は高鳳翰は44歳から60歳前後までの間に、「石林浄香図」だけでなく、20点を越える自身の肖像画を制作したことがわかっています。これは当時としても異例の数で、イメージも、ひとり風雅を楽しむ姿、知人との雅集図など、その一つ一つが、時々の彼の交友や思惑を象徴するものです。高鳳翰は自身の肖像によって、生涯の足跡を残し、自己を顧みる縁としたのかもしれません。19世紀後期以降、写真技術の発展に伴い、こうした肉筆肖像画は廃れていきます。その前時代における肉筆肖像画の役割の一端を、これらの文人肖像画は伝えてくれます。（都甲さやか）

※図2は『故宮博物院3　元の絵画』NHK出版、1998年。図5は、小川陽一「明清の肖像画と人相術－明清小説研究の一環として―」（『東北大学中国語学文学論集』第四号、1999年）より抜粋しました。

図1

図2

図3

図4

図5

季刊 美のたより No.217
令和3年12月24日
発行　大和文華館

Copyright © The Museum Yamato Bunkakan. All RightsReserved.